



ARTRAMBLE

学芸員の視点1 26

みなと物語

平成28年度の新収蔵品をめぐって — 鈴木慈子

学芸員の視点2 46

系譜を読みとく — ベルギー奇想の系譜展より

— 小野尚子

ショート・エッセイ 6

「男と女」を超えて — 村田大輔

トピックス 7

ベルギー奇想の系譜展 関連事業

注目作業紹介プログラム チャンネル8 「井上涼 忍者と県立ギョウカイ女子高校」展

「2017県展」開催

美術館の周縁 8

芸術と幻滅 Art & Disillusion — 小林 公

スペインのフィゲラスにあるダリ美術館を描いた2枚の絵。両者を見比べると、左の絵の白く抜かれたドットが、右の絵のほとんど同位置にある、描かれたドットと一致するのがわかります。キャンバスにドットのシールを一律に貼り、その上から絵を描いてから、シールをひとつひとつ別キャンバスに移し替えることで作られるのです。この絵は、描くだけでなく、その後大きな操作（絵に付随する技法以上の）を加える点、それが作品の本質的な内容になる点でユニークです。

印刷された図版や旧来のテレビ画面は、似たようなドットの集合からなります。マス・メディアの特性がこの絵に見られるのです（作者が参照した美術館の

イメージもマス・メディアに流通しているものです）。ただ、コレクションから前者のドット内は均質ですが、後者のドットは描写の断片です。マス・メディアのスタイルに近づきながらも、一定の距離を置く表現であることは留意すべきでしょう。

描いた量を100%とすると、二つに分配した後は、左がその60数%、右が30数%を占めています。また、描写の部分がドットとしてそれぞれ孤立する方と、ドットを抜かれながらも面として繋がる方ではその見えも異なります。作者、渡辺聡が意図したこの2枚の差異も、マス・メディアの本質である複製性との落差を示しています。

(出原 均/当館学芸員)



渡辺 聡(1967—)

《Museo Dalí》

2008(平成20)年

油彩・布/油彩、塩化ビニールステッカー・布

91.0×122.0cm(×2点)

平成28年度 黒田賢三氏寄贈

みなと物語 平成28年度の新収蔵品をめぐって

鈴木慈子

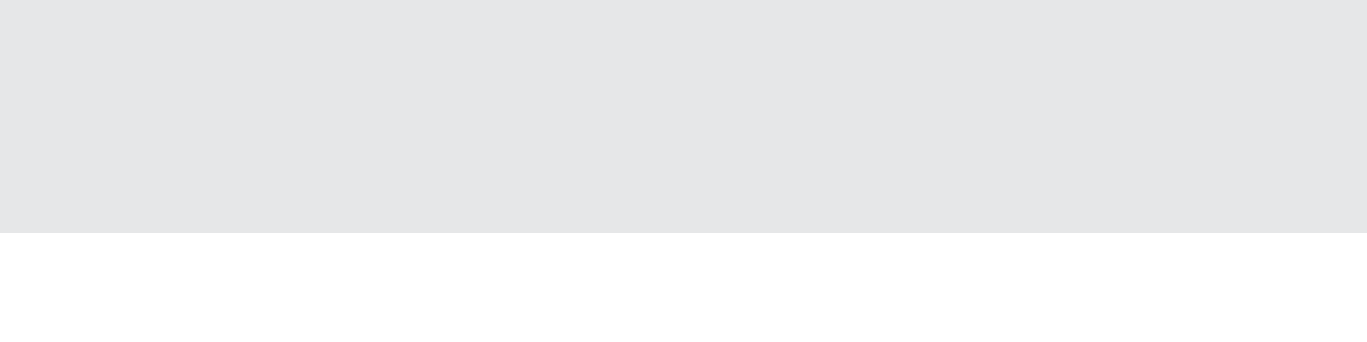


図1 会場風景

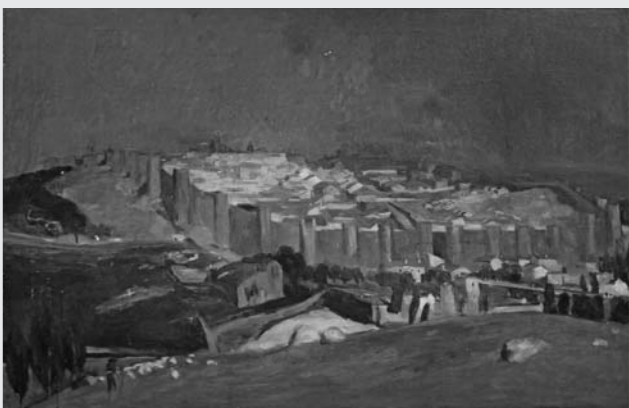


図2 金山平三《無題(城壁のある町)》1914-15年

毎年、夏に開催される「みなとこうべ海上花火大会」の夜には、当館から花火をのぞむことができ、神戸港が近いことを実感する。今年は神戸開港150年を記念して、打ち上げられる花火が15,000発に増え、例年よりも盛大であった。第1回大会は1971年、当館の前身である兵庫県立近代美術館はその前年の開館であり、ほぼ同じ年月、ここ神戸の地で歴史を刻んできた。

このたびの県美プレミアム（2017年7月8日～10月15日）の特集は「みなと物語 新収蔵品を交えて」と題し、新しく収蔵された作品と既存のコレクションとを展示した。神戸開港150年にちなんでテーマを「みなと」とし、船着き場や、水の出入り口、人や物の集まるどころ、行き着くところといった語意を展示構成に生かすこととした。

展示は4つのパートから成る。パート1は「波濤を越えて」。神戸生まれの画家・西村元三朗（1917-2002）《神戸港》をプロローグとして、人々が往来する場としての港の役割に注目した（図1）。まず、神戸港からフランスへと旅立った小出楯重（1887-1931／1921年、クライスト丸に乗船）、坂田一男（1889-1956／1921年、伊予丸）、上山二郎（1895-1945／1922年、賀茂丸）、佐伯祐三（1898-1928／最初の渡航1923年、香取丸）、清水多嘉示（1897-1981／1923年、諏訪丸）の作品を集めた。また、神戸からブラジルへ向かう移民船を描いた大岩オスカール（1965- ）の《ぶらじる丸》（寄託作品）、杉原千畝が発行した「命のビザ」を手に神戸へたどりついたユダヤ難民を写した〈流氓ユダヤ〉シリーズ（寄託作品を含む）も展示した。ほかに、平成26年度に収蔵され今回が初めての展示となる今井俊満（1928-2002）《ヴェネチアに捧ぐ 波濤図》を中心に、主として海に関する様々な表現を並べた。

小磯良平（1903-1988、笠崎丸に乗船）と金山平三（1883-1964、平野丸）も、神戸港からヨーロッパを目指した。それぞれの記念室で展示した新収蔵品として、小磯良平は洋風のコスチュームをまとう女性像《婦人像》（1977年）と

実業家の肖像画《片岡直方氏肖像》（1949年頃）の2点。人物画を得意とする小磯は、財界人などからの制作依頼も多かった。金山平三はヨーロッパ滞在時に制作した《無題（城壁のある町）》（1914-15年）（図2）が新たに加わった。当館では、同じ風景（スペインのアビラ）を描いた作品をすでに2点収蔵している。本作は既存の2点よりもサイズが大きく、城壁の全貌を画面におさめ、羊の群れと羊飼いらしき人物が前景に加えられている。

パート2は「集合」。「みなと」には港湾だけでなく、人や物の集まるどころという意味がある。このパートでは作品それ自体を「みなと」と見なし、何かが集まっている表現を並べた。新収蔵の渡辺聡（1967- ）《Museo Dali》（2008年）はドットの集合体である。この作品については、本号の表紙を参照いただければと思う。

吉原治良（1905-1972）の《群像》は戦後まもない頃の作品で、白と黒のみを用い、抽象的に人の姿を表している。のちに吉原が率いた前衛美術集団「具体美術協会」のメンバーによる作品にも、集合や繰り返しの構造が見出せる。

グループ〈位〉の《非人称人間》には、集合、もっといえば集団といった趣がある。グループ〈位〉は、1965年、神戸の若い美術家9名によって結成された。《非人称人間》は1967年、神戸開港100年祭のイベントのひとつ「神戸カーニバル」で発表された作品である（2004年の小企画展の折に再制作され、当館に収蔵された）。カーニバルのパレードで《非人称人間》約30名が三宮フラワロードなど神戸の街を練り歩き、グループ〈位〉は「ユーモア賞」を受賞した。

パート3は「重層」。「みなと」は、物事が行き着き、とどまるころのたとえでもある。画家が筆を運び、版画家が刷りを重ねる、そうした行為の積み重ねによって、絵画の表面に豊かな質感が生まれる。

新収蔵の星襄一（1913-1979）《王の樹》（1976年）（図3）は木版画で、油性インクを用い、凹版と凸版を複雑に重ねる独特の技法を用いている。独創的



図3 星襄一《王の樹》1976年



図4 会場風景

な手法によって出来上がった絵肌の質感は、見どころのひとつである。兵庫県立近代美術館の開館当初から、版画は収集方針の柱のひとつであり、このたび、戦後日本の版画史に独自の足跡を残した作家の代表作が加わった。

注意深く塗り込められた絵肌には、描く対象に対する画家の思い入れ、制作にかけた時間の長さや、感情の累積も感じられよう。貝原六一（1924-2004）は1970年代から「ドン・キホーテ」を繰り返し描いており、新しく収蔵された《落馬するドン・キホーテ》（1982年）も、そのうちの1点である。また新収蔵の正木隆（1971-2004）《DIVING work 02-1》（2002年）では、濃紺の絵具が厚く塗られた背景に、人の横たわる白いベッドが浮かび上がる。

一方「具体美術協会」のメンバー嶋本昭三（1928-2013）や白髪一雄（1924-2008）、元永定正（1922-2011）らの作品では、もはや絵筆は用いられない。絵の具は投げつけられ、あるいは足でかきまわされ、あるいは傾けたカンヴァスの上をゆっくりと流れ、その痕跡が絵画を成立させている。

パート4は「みなとからアジアへ」（図4）。新たに収蔵された安井曾太郎（1888-1955）《女の顔》（1931年）（前号の表紙参照）と福田眉仙（1875-1963）《中国スケッチ》（1938年）を契機として、「20世紀前半に描かれたアジア」というテーマを設定した。

安井曾太郎の描いた和装の女性像、金山平三が訪れた街角（現在のソウル）、伊藤慶之助（1897-1984）が目にした「苦力」、——フランスで絵画を学び、西洋を肌で知る画家たちが見出したアジアとは、どのような場所だったのか。

パート4はパート1と対応し、船で旅した画家たちに注目している。このパートの出品作家のほとんどがヨーロッパ留学を経験した後にはアジアを旅し、そこでの見聞を主題とした。伊藤慶之助は1929年、榛名丸でフランスに向かい、1932年に帰国。1930年代後半の作品をみると、アジア的なものへの関心を強めていたことがわかる。1939年、伊藤は神戸港から長城丸で天津へ向かった。



図5 福田眉仙《中国スケッチ 盧溝晩色》1938年

同年の作《苦力と娘》は翌1940年の第18回春陽会展で発表された作品で、立ち並ぶ人物たちの力強さが目を引く。

1938年、前年の盧溝橋事件を引き金に始まった日中戦争のさなか、福田眉仙は陸軍従軍画家として中国大陸にわたった。新収蔵の《中国スケッチ》12点に描かれた場所は、北京郊外（盧溝橋）、徐州、南京、張家口、大同、厚和市（現在のフフホト）、陰山山脈、包頭、青島、廬山、鄱陽湖、安慶と広範囲にわたる。翌1939年に「聖戦美術展」に出品した《盧溝晩色》は本スケッチ（図5）とほぼ同工である。また1940年に制作された神護寺《聖戦々跡襖絵》にも、盧溝や徐州（徐州会戦の地）でのスケッチが生かされている。現地の風景や人々の生活は、時局をうかがえないほどに淡々と写し取られているが、戦争という時代背景を考え合わせると、とたんに複雑さを帯びる。

福田眉仙のスケッチ群と響き合う既存のコレクションとして、関口俊吾（1911-2002）が「フランス領インドシナ」（仏印）を描いた素描を並べた。関口は1943年、ハノイの文化会館へ派遣され、戦後1946年まで滞在した。公務を帯びてこれほど長く仏印に滞在した画家はほかにいない。これらの素描もいかにも淡々としているが、中には阮朝皇帝の保大帝夫妻の肖像や軍事的要衝であったハイフォンが含まれるなど、この画家が特別な位置にあったことが察せられる。

公的な目的のための作品としては、和田三造（1883-1967）による《朝鮮総督府壁画画稿》もその代表例といえよう。かつて朝鮮総督府が入っていた建物は1995年に取り壊され、今は跡形もない。ホール壁面から取り外された巨大な壁画は、長らく韓国国立中央博物館（ソウル）の収蔵庫に眠っていたが、2014年に同館で開催された特別展「『東洋』を描く」で再び姿を現した。そのときの展示風景も、参考資料として展示室に掲げた。

なお新収蔵品のうち、現在、調査や修復作業を続けている橋本関雪（1883-1945）、田中竜児（1927-2014）の作品や和田三造の肖像画については、今回は展示を見送ったが、いずれも当館のコレクションを充実させるものであり、今後さまざまな機会に登場するであろう。

美術館もまた、多くの人々や作品が集まる「みなと」である。連続と収集される作品は、それぞれが固有の物語をもつだけでなく、他の作品たちとさまざまな組み合わせられ、新たな物語を語り出す。今回の新収蔵品を見渡すと、県内出身作家が11名中9名と多いが、兵庫という地域性によって解釈されることもあれば、より広い文脈に位置づけられることもあるだろう。みなとの物語は、これからも続いていく。

貴重な作品や資料を寄贈いただいた皆様に、あらためて感謝申し上げます。

（すずき・よしこ／当館学芸員）

「男と女」を超えて

村田大輔



作家による《忍者と県立ギョカイ女子高校》のためのイメージ 2016年

ショート・エッセイ

幼い頃に夢中で見たテレビドラマのひとつに《スチュワーデス物語》があります。JALの客室乗務員の訓練生を描いた本作の主人公は、「ドジでノロマな亀」の松本千秋。どこからどう見ても落ちこぼれの松本が数々の訓練を乗り越えてスチュワーデスになるまでを描いた本作は、元パーサーの教官の村沢浩との恋愛や、家族との問題なども織り交ぜながら、笑いと涙のストーリー展開を繰り広げた人気ドラマでした。なかでも当時私が一番関心を寄せていたのが、松本と同期の女訓練生たちの間のドタバタ劇でした。「くれない寮」に住む彼女たちは、姉御、調子者、世話好きといったいろいろな性格の者がいました。落第生の松本は彼女たちに時にいじめられるのですが、結局ドジな松本を中心に皆の間に友情が培われていきます。私は幼い頃、こうした女同士のドラマの台詞を覚えるぐらい必死で見っていました。

しかし、もう少し年をとってから《スチュワーデス物語》を「斜めから」観察してみると、このドラマで描かれた女同士の友情は、実は物語の中心ではないことがわかりました。訓練生たちの絆は物語のなかで一定の役割を果たしているのですが、ドラマの核心は「男と女」、つまり村沢教官と松本との恋と愛なのです。最終回は村沢と松本を男女として結びつけるような終わり方（例えば結婚）ではありませんでしたが、そうした男女の愛の展開は物語のなかで十全に描かれ、男女の「ゴールイン」が最後に示唆されていました。つまり綿密に、時にコミカルに描かれた女たちのドラマは、村沢と松本の男女関係を注意を向けるための一種の道具として描かれ、男女の恋愛を舞台に仕立て上げる影の立役者だったのです。他の日本のテレビドラマも観察してみると、描かれる女たちの友情のほとんどが、何らかの意味で「男と女」のための助演的役割を果たしていることがわかります。

テレビドラマだけでなく小説や映画の大半は何らかのかたちで「男と女」を描いています。フィクション作品のジェンダー・バイアス（性的偏見）を測定する「ベクデル・テスト」は、物語のなかに「最低でも二人の女性が登場するか」、「女性同士の会話はあるか」、「その会話のなかで男性に関する話題以外が出てくるか」を問うものですが、例えばフィクション映画の多くはこの設問全てをクリアしないそうです。男女の恋愛テーマを扱うことが多い日本のテレビドラマはどのくらいこの設問をパスするのでしょうか。周知のとおり、恋や愛は「男と女」に限った話ではなく、また、「男」も「女」も多次元存在ということが近年、「やっど」活発に議論されるようになりました。「男女の愛」が実は近代以降の制度によって補完され続けていることも、わかってきました。「男女の愛」は万人が経験するものではなく、また「男」や「女」であ

るからといってずっとそのまま「男」や「女」であり続けるとは限らないのです。つまりメディアで描かれる典型的な「男女の恋・愛」は時に強要的な圧力にもなり得るもので、誰もが簡単に「自然に」受け入れている、と見るのは間違いないのです。

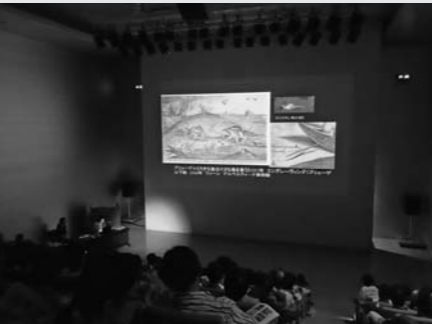
さて、「もともと女の子が仲良くなる話が好き」と述べる井上涼さんの好きな映画は《ロミー&ミッシェル》（1997年、アメリカ）です。二人の女、ロミー・ホワイトとミッシェル・ワインバーガーは幼なじみで同郷、いまま大親友でルームメイト。ロサンゼルスでバイトを続けて気ままに暮らしています。故郷で高校卒業10年の同窓会が開催されることを聞きつけ、かつていじめられていた二人は同級生を見返そうと「私たちがポストイットを発明した」という驚きの嘘で身を固めて同窓会に参加します。しかし、案の定、この嘘は簡単に見破られてしまい、同窓会でもいじめられます。物語は高校時代の回想シーンも織り交ぜながら進んでいくのですが、典型的な高校青春映画のように、男にちやほやされる女、モテモテのフットボール選手、男にモテるために努力するロミーとミッシェルといった「男と女」のエピソードがコメディタッチで描かれていきます。しかし、「男と女」がメインで物語が進んでいくかと思いきや、映画の後半、大富豪に変貌した同級生サンディ・フリリングが自家用ヘリで同窓会に登場して以降、「男と女」が急速に分解されていきます。昔からミッシェルに恋心を持っていたサンディはヘリから降りて、ミッシェルにダンスを申し込みます。するとミッシェルは「いいわよ、でもロミーも一緒よ」と返答するのです。そして三人揃って、空前絶後のダンスを踊り、皆でヘリへ乗り込み、飛び去っていきます。そして映画は、ロサンゼルスでサンディの資金でブティックを開店した仲むつまじいロミーとミッシェルを映し出し終わります。つまり、この映画では彼女たちの絆が物語の中心であって、「男と女」の関係を演出するものでも、「男と女」へと収斂していくためのものでもないのです。「男と女だって？そうね、そんなものもあるわね」と言い放つような清涼感がここにあります。

今回の井上涼さんの新作《忍者と県立ギョカイ女子高校》も「女子校」を舞台にする物語です。忍者とギョカイ（魚介）のドタバタ劇という奇想天外な展開における「女同士の友情」は、「男と女」のための演出ではありません。だからこそ、程度は異なるにせよなんらかの意味で因習的な「男と女」、「男」、「女」を窮屈に感じている現代人は、井上涼という作家に魅了され、彼の作品にポジティブな可能性を見いだすのではないのでしょうか。

（むらた・だいすけ／当館学芸員）

ベルギー奇想の系譜展 関連事業

本展では毎週さまざまなイベントを実施しました。まず記念講演会では、明治大学名誉教授の森洋子氏と三重県立美術館館長の速水豊氏に貴重な研究成果をご教示いただきました。ブリューゲル研究の第一人者である森氏には、ブリューゲルの作品に描きこまれた豊富な図像をいくつも取り上げ、その意味や発想源について丁寧にご解説いただきました。またシュルレアリス



森氏による記念講演会



速水氏による記念講演会

ム研究者の速水氏のお話は、マグリット作品に顕著な二重性や言葉とイメージの関連性を中心に、作品を読み解くための示唆に富んだものでした。その他にも今回は、ベルギー大使館にご協力頂き、有名なシンガーソングライターのSIOEN氏による公演も実現しました。コンサートは二部構成で開催。第一部はエントランスホールで来館者のどなたにでも聴いて頂き、第二部は予約されたお客様に、レストランでベルギービールを飲みながら演奏を楽しんで頂きました。その他にも、有名チョコレートバイヤーのみりさんお勧めのベルギーチョコレートを試食しながらお話を聞くことのできる講座や、学芸員による解説会、また、奇想の世界をコラージュで制作することも向けのイベントなども実施しました。さまざまな角度からベルギーの持つ多彩で奥深い魅力に触れることで、展覧会もまたより深く楽しんで頂けたのではないのでしょうか。

（小野尚子／当館学芸員）

注目作家紹介プログラム チャンネル8 「井上涼 忍者と県立ギョカイ女子高校」展

本展のオープンを記念して8月26日（土）、レクチャールームに於いて「井上涼の凱旋?ヘタウマコンサート」を開催しました。井上涼氏は現在メディアでも活躍中のアーティスト。金沢美術工芸大学在籍中に開催された「美大祭」で出品した映像作品《鶴の恩返し》で注目を集め、卒業制作の《赤ずきんと健康》で自身の表現世界を確立。最近では「子どもと美術を楽しみたい!キラキラ、ざわざわ、ハラハラ」（横須賀美術館、2015年）、「井上涼のとらとらまごまご」（大原美術館、2016年）といった美術館での展覧会も開催しています。現在では映像制作のみならずパフォーマンス表現も積極的に繰



展覧会オープニング記念イベント「井上涼の凱旋?ヘタウマコンサート」(8月26日(土)レクチャールーム)より

身が制作した映像にあわせて歌う、「カラオケ」を行いました。井上氏の独特の歌声とアニメーションが絶妙にマッチした時空間が生みだされ、彼の映像世界が目の前で繰り広げられました。子どもから大人の幅広い年齢層の鑑賞者が井上氏のライブを堪能しました。

（村田大輔／当館学芸員）

「2017県展」開催

55回目を迎えた県展は、7月29日から8月19日までの19日間、耐震補強工事を終えて春にリニューアルオープンした原田の森ギャラリーに会場を戻して開催しました。以前より明るくなった大展示室とエレベータを設置するなどバリアフリー機能を強化した原田の森ギャラリーでの展示ということで、一昨年末までとは少し異なる部分もありましたが、来場者のみなさんの反応は良好で、力作を展示するにふさわしい会場となりました。

今年度の応募数は、臨時的に県立美術館で開催した昨年度に及ばなかったものの、一昨年度を上回る544点に上り、絵画、彫刻・立体、工芸、書、写真、デザインの部門毎に行われた厳正な審査を経て197点の作品が入選となりました。審査員の先生方からは6部門全てにおいて応募作品のレベルが高く、選ぶのが困難だったとお言葉をいただきました。



会場風景。画面中央 藪下実氏《ゆらぎ》



会場風景

のみなさんに多大なご協力をいただいて開催することができました。多くの場面でご協力いただいたことをこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

（避免寛子／当館学芸員）

●——編集後記

●美術館の指標を「来館者数」のみではかるべきではありませんが、「ベルギー奇想の系譜展」を皮切りに、当館の特別展には連日多くの来館者の方々が押し寄せ（←大げさではありません）、関係者ともども嬉しい悲鳴を上げている夏の日々今日この頃。ベルギー展に見られた「奇想の系譜」を、担当の小野学芸員が本号で鋭く切り込みました。果たして当館のこの熱気も「奇想」？

●その多くの来館者の皆様をお迎えする当館スタッフは、連日大わらわ。ちょうど7月から県美プレミアム、特別展、チャンネル8に加え、近隣の原田の森ギャラリーでは県展の開催と続いて大わらわに拍車がかかり、毎日暑い中お祭り騒ぎの狂乱となり…おやここにも「奇想」が。こうしているんな方々が訪れる当館が、地域社会から遠く海外にまで門戸を広げる皆様の「みなと」となるべく、日々精進していく所存でございます。（相良）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.56

2017年9月24日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:ウニスガ印刷株式会社

芸術と幻滅 Art & Disillusion

小林 公



フリデリチアヌムの正面部分。通常は「MUSEUM FRIDERICIANUM」と掲げられているところがトルコ出身のバヌ・セネツゲルの作品として「BEINGSAFEISSCARY」（安全であることが怖ろしい）の文字と置き換えられている。

美術館の周縁

ゲーテ・インスティトゥートが主催する視察プログラムに参加する機会にめぐまれ、日本だけでなく韓国、台湾、モンゴルからの総勢17名の参加者の一人としてドクメンタ14を訪れた。日本からの参加者はその後ミュンスター彫刻プロジェクトを訪れたのと、個人的にヴェネツィアのビエンナーレも訪問したので、3つの国際展を巡ったことになる。ここではそのうちでもっとも強い印象を残したドクメンタ14について、偏向を恐れずに私見を書き留めておきたい。

ポーランド出身のアダム・シムジックをアーティストック・ディレクターに迎えたドクメンタ14は「アテネに学ぶ Learning from Athens」をタイトルに掲げ、本拠地のカッセルだけでなくギリシャのアテネをあわせて二都市開催という挑戦が話題を呼んだ（アテネ会場は未見）。なぜアテネか。その理由には様々な説明があるが、特にEU全体の課題となっている難民問題とギリシャの財政危機は多くの人にとってうなずかれるものだろう。これら今日的で具体的な問題は、資本主義、民主主義、民族主義、グローバリズムとナショナリズムといったより理念的なテーマをも当然ながら導くことになる。こうしたテーマの数々はいずれも重大なものであり、それゆえ今日の世界が直面する問題にあらかた言及しようとする総花的な試みと見えるかもしれない。

実際の展示の規模も相当なもので、カッセルだけで35の会場を擁し、参加作家も100人以上。3日間の視察日程をもってしてもすべての展示を見つづことは難しかった。日程の問題というよりも、そもそもこの催しは一人の人間が単独で消化できる限界を超えている。これは否定的な意味で言うのではない。ドクメンタ14での試みは個人で回収しきれない内容が残らざるを得ないけれども、そうした部分は他の人と情報交換や議論をすることで補完すれば良いし、そのような鑑賞体験の複数化こそが望まれていると理解したからである。会場を離れてもドクメンタ体験が続けられるように、公式ウェブサイトには各会場や作家の解説、関連誌『South』の記事が公開されている。論文集のようなカタログなど読むべき文章は膨大にある。したがってドクメンタ14は、完結したひとつのまとまりとして何らかのコンセプトによって読み解いていく展示というよりも、データベースのようなイメージで捉えた方が良いだろう。ある作品と作品を結びテーマないしキーワードを補助線として設定し、それを幾筋にも引くことで浮かび上がる作品同士のネットワークを思い描いていくというかたちである。

様々な引かれる補助線の中で稿者が特に頼ったのは、新古典主義がヨーロッパにもたらした憧れと幻滅という筋書きである。きっかけはメイン会場のひとつノイエ・ガレリーで目にとまったヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンの肖像と彼の著作（『ギリシア美術模倣論』（1755年）の手稿（複製）や『古代美術史』（1764年）、『古代美術史註釈』（1767年））である。

「アテネに学ぶ」というタイトルを掲げている以上、その先駆的存在であるヴィンケルマンが言及されるのは当然である。しかしながら、ドクメンタ14のアイコン的存在であるマルタ・ミュヒンの《本のバルテノン神殿》がやはりギリシャ神殿風の正面を持つフリデリチアヌムと向かい合うようにフリドリヒス広場に建つ光景は、「芸術」が持ちうる破壊的側面を想起させる役割もまたこのドイ

ツの美術史家に与えられていることを示唆する。

ミュヒンの作品は発行禁止処分を受けた書物を集めたもので、1983年にブエノスアイレスで最初に発表された。それが今回フリドリヒス広場に招かれたことで、そこが1933年にナチスによる焚書が行われた場所であることを強く想起させる結果となった。ある記録写真には、ヨーロッパ大陸で最初の公共博物館として1779年に創建されたフリデリチアヌムを背にして焚書が行われている光景が写されている。博物館という記憶の保管庫と焚書という蛮行は対極にあるものと言いたいけれども、実際はそうではない。

フリデリチアヌムから少し遅れて、パリでも革命の余波により1793年にルーヴル美術館が開館した。それから10年と経たないうちに、プリミティブ派と呼ばれる芸術家たちは技術の進展は芸術の純粋さを損なうとして、ルーヴル美術館に火を放てると言っていた。その急進的な一派は古代ギリシャへの憧れと啓蒙の哲学が生んだあだ花である。彼らの純粋性への志向は、同時代の芸術は墮落しており、これを回復するには理想を体現する古代ギリシャの表現を模倣するのが最善であると唱えたヴィンケルマンに端を発するのである。著名な美術史家のゴンブリッチは、ヴィンケルマンがギリシャ芸術の本質を、それを生み出した人々の民族性や政体、彼らが暮らす風土などによって説明することに努め、これにより「ギリシャ精神」なるものを語りうると考えていたことの歴史的重要性についてしばしば語っている。なぜなら、特定の芸術表現をそれを生み出した集団の「精神」の表現であると捉える姿勢は、ロマン主義やヘーゲルの哲学へと受け継がれ、さらにはナチスによる退廃芸術の烙印を可能にするものともなったからである。理想への憧れは排斥の論理ともなり得、種々の暴力と幻滅とをしばしばもたらす。（註）

難民の問題を出発点に、中東や北アフリカとヨーロッパとの関わりを（例えば18世紀にまでさかのぼって）捉えなおすというのがこのたびのドクメンタ14であったとするならば、その内容がヨーロッパ偏重とみられることは避け得ないだろう。しかしそれは、自覚的な選択と考えるべきである。ドイツが今日直面する問題に芸術がどのように応えうるのがそこでは問われているからだ。だからこそ非ヨーロッパ圏の人間がドクメンタから受け取るべきは、「難民問題」など今日の世界を覆う個々の具体的な問題以上に、それぞれに置かれた立場に立って、自身がいま抱えている問題の歴史的経緯を紐解いていこうとする姿勢であり、自国の過ちと向き合う勇気の方だと思うのである。

（こばやし・ただし／当館学芸員）

（註） Ernst H. Gombrich, *Kunst und Fortschritt: Wirkung und Wandlung einer Idee*, Köln, 1978 (エルンスト・H・ゴンブリッチ著、下村耕史・後藤新治・浦上雅司訳 「芸術と進歩—進歩理念とその美術への影響—」 中央公論美術出版社 1991年)； E. H. Gombrich, "Styles of Art and Styles of Life" in *The Uses of Images*, London: Phaidon, 1999(2000), pp. 240-261; E. H. Gombrich, "the Primitive and its Value in Art" in *The Essential Gombrich*, London: Phaidon, 1999, pp. 295-330. なお、ヴィンケルマンの存在に注意をうながすドクメンタ14のレビューに以下のものがある。Pablo Larios, "documenta 14 Kassel: Neue Galerie" in *Frieze. Com*, published in 7th June 2017. (<https://frieze.com/article/documenta-14-kassel-neue-galerie>)